

自叙伝(荒川区在住 S さん 90 歳男性)

目次

はじめに 一人の職人が歩んだ昭和史と学び

第 1 章:故郷での生活と戦争体験をまとめて

第 2 章:弟子入りから修行の始まり

第 3 章:一人前になるまでの成長過程

第 4 章:独立と結婚という人生の転機

第 5 章:職人として最も充実した時期

第 6 章:技術と職人としての誇り

第 7 章:引退後の生活

エピローグ:人生全体の振り返り

はじめに 一人の職人が歩んだ昭和史と学び

本自叙伝は、昭和9年生まれの紳士服仕立て職人が辿った70年以上にわたる人生と、そこから得られた学びの記録です。茨城県常総市の農村に生まれ、戦争の混乱期に幼少期を過ごし、15歳で単身東京に出て紳士服職人の道を歩み始めた筆者は、40年間の職人人生を通じて激動の昭和を生き抜きました。

荒川区の小さな仕立て屋での8年間の厳しい修行から始まり、東長崎「上海テ一一」での技術習得、結婚と独立、そして参議院議員会館での3年間という職人としての頂点まで、一人の職人が歩んだ道のりからは、現代にも通じる普遍的な学びが導き出されます：

1. 基礎への徹底的なこだわりが生む職人としての誇り

5年間の修行で一人前、その後3年の恩返し奉公という長期間の基礎習得を経て、さらに裁断と型紙の専門技術を3年かけて学び直しました。「型紙が命」「自分の腕だけでやってきた」という言葉に表れるように、基礎技術への妥協なき追求が、40年間にわたる職人としての誇りと信頼を築きました。短期的成果を求める現代においても、基礎への投資こそが持続的な成功の源泉であることを示しています。

2. 時代の変化に適応しながら本質を守り抜く柔軟性と一貫性

戦時中の材料不足(ラシャの代わりに綿を使用)から高度経済成長期の豊かさまで、激変する時代環境の中でも「お客様に満足してもらう」という職人の本質を貫きました。既製品の分業制では技術が向上しないと判断し、注文服の世界へ転身するなど、変化を恐れず本質的価値を追求する姿勢が、職人としての成長と顧客からの信頼獲得につながりました。

3. 家族との協業と相互支援による人生の充実

妻との二人三脚による仕事の発展、3人の息子を育てながらの家業経営、そして引退後の夫婦での穏やかな時間まで、家族を単なる私生活ではなく人生のパートナーとして位置づけました。「奥さんも洋服作りを手伝ってくれた」「色々やってもらった」という感謝の言葉が示すように、個人の技術と家族の支えの相乗効果が、持続可能な職人人生を実現しました。

この職人の人生は、決して華やかではありません。しかし「苦労の多い人生だった」と振り返りながらも「いい人生だった」と断言できる充実感は、技術への誠実な向き合い方、人との信頼関係の築き方、そして与えられた環境の中で最善を尽くす生き方から生まれています。

現代のような変化の激しい時代だからこそ、一人の職人が示した「誠実さ」「継続力」「感謝の心」という普遍的価値の重要性が浮き彫りになります。この記録が、現代を生きる多くの方々にとって、自分らしい人生を歩むためのヒントとなることを願っています。

第1章：故郷での生活と戦争体験をまとめて

昭和九年、茨城県常総市大生郷。田んぼが広がる静かな里に、元気な産声が響いた。

「男の子だ！」

産婆さんの声に、家族の顔がほころんだ。既に二人の子どもがいる家庭に、三番目の子として生まれた男の子。後に五人兄弟の真ん中っ子となる彼の人生が、ここから始まった。

父親は瓦職人だった。朝早くから家を出て、近所の屋根に上がり、一枚一枚丁寧に瓦を葺いていく。手先の器用な父は、ヤニを使った補修も得意としていた。職人という仕事は不安定に思われがちだが、父には確かな腕があり、定収入を得ていた。それでも決して豊かではない。五人の子どもを抱えた家庭の食卓に並ぶのは、畠で採れた野菜とさつまいもがほとんどだった。

「また芋かよ」

兄弟の誰かが口にする愚痴を、母は苦笑いで聞き流していた。米はあるにはあったが、貴重品だった。普段の食事はもっぱら芋。朝も昼も夜も、形を変えて食卓に登場する芋に、子どもたちは次第に飽き飽きしていった。

それでも、家族は仲が良かった。男三人、女二人の兄弟は、狭い家の中で肩を寄せ合って育った。喧嘩もしたが、困った時は助け合う。そんな温かい家庭だった。

昭和十二年、日中戦争が始まった。遠い大陸での戦争は、最初のうちは茨城の片田舎にはあまり影響がなかった。しかし、やがて戦争の影は確実に大生郷の人々の生活にも忍び寄ってきた。

「配給だ、配給」

村の青年団が触れて回る声が聞こえると、母は慌てて手拭いを頭に巻いて家を出た。米や砂糖、塩といった生活必需品が配給制になった。自由に買い物ができる時代は終わり、切符を握りしめて長い列に並ぶ日々が始まった。

戦争が激しくなると、食べ物はますます乏しくなった。芋ばかりの食事に慣れていた一家でも、さすがに苦しい思いをした。お腹を空かせても、食べるものがない。そんな日が続いた。

「今日は何も食べられないかもしれない」

母の不安そうな声を聞くと、子どもたちは黙って頷いた。文句を言っても仕方がない。みんなが我慢している時代だった。

昭和二十年に入ると、戦況はさらに悪化した。東京への空襲が激しくなり、夜になると東の空が赤く染まるのが見えた。

「おい、見に行こう」

年上の兄に誘われて、村の高台に登った。そこから東京の方角を見ると、夜空が真っ赤に燃えていた。

「東京が焼けてる…」

息を呑んで眺めた光景は、一生忘れられないものになった。遠く離れた場所で、大勢の人々が命を落としている。そんな現実を、十歳の少年は隣ながら理解していた。

空襲警報が鳴ると、村の火の見櫓から鐘の音が響いた。カーンカーンという音が夜の静寂を破ると、人々は慌てて電灯を消し、雨戸を閉めた。幸い、茨城の田舎まで爆撃機が飛んでくることはなかった。それでも、いつ自分たちの頭上に爆弾が落ちてくるかわからない恐怖は、常に心の奥底にあった。

戦争中、物資の不足は深刻だった。衣料品も例外ではなく、新しい服を作るための布も糸も手に入らなかった。母は古い着物をほどいて、子どもたちの服を作り直した。継ぎ接ぎだらけの服を着て、子どもたちは恥ずかしそうにしていたが、そんな格好をしているのは自分たちだけではなかった。

「贅沢は敵だ」

そんな標語が至る所に貼られていた時代。贅沢どころか、生きるのに精一杯の毎日だった。

そして昭和二十年八月十五日。

正午のサイレンが鳴り、ラジオから天皇陛下の声が流れた。雑音の多い放送で、何を言っているのかよくわからなかった。だが、大人たちの表情が一変した。

「戦争が終わった」

その言葉が村中に広がると、人々は様々な反応を示した。安堵の表情を浮かべる者もいれば、呆然として立ち尽くす者もいた。そして、多くの人が泣いていた。

「なんで泣いてるんだ？」

子どもにはわからなかった。戦争が終わったなら、もう空襲を心配しなくていい。もう食べ物に困ることもなくなるかもしれない。喜ぶべきことなのに、なぜ大人たちは泣くのか。

後になってわかったことだが、彼らは複雑な気持ちを抱えていた。戦争が終わった安堵感と同時に、これまで信じてきたものが崩れ去った虚無感。そして、愛する人を失った悲しみ。様々な感情が入り混じった涙だった。

戦争は終わったが、生活がすぐに楽になったわけではなかった。配給制度は続き、食べ物は相変わらず不足していた。それでも、空襲の恐怖がなくなったことで、人々の心には希望の光が差し込んでいた。

十一歳になった少年は、この激動の時代を肌で感じながら育った。戦争という巨大な出来事に翻弄されながらも、家族の愛情に包まれて成長した。やがて彼は中学生になり、人生の大きな転機を迎えることになる。

常総の里で過ごした幼少期は、決して豊かではなかった。芋ばかりの食事と継ぎ接ぎの服。それでも、家族がいて、屋根のある家があって、明日への希望があった。この故郷での体験が、後の職人人生の礎となることを、この時の少年はまだ知らなかつた。

田んぼに囲まれた小さな家で、五人兄弟が寄り添って生きた日々。それは、彼の人生の原点となった大切な時間だった。

第2章：弟子入りから修行の始まり

戦争が終わって四年が過ぎた。十五歳になった少年は、中学校の卒業を控えていた。

「お前はどうするんだ？」

父親の問いかけに、少年は戸惑った。戦後の混乱期、進学できる家庭は限られていた。五人兄弟を抱える家計では、高等学校への進学は現実的ではなかった。

「働くしかないだろう」

兄たちも同じ道を歩んでいた。家族を支えるため、早くから働きに出る。それが当たり前の時代だった。

そんな折、思わぬ話が舞い込んだ。

「東京から疎開してきた人がいるんだが、弟子を探しているそうだ」

近所の人が持ち込んだ話だった。その人は紳士服の仕立てを生業としており、戦争中に東京から常総に疎開してきたという。戦後、東京に戻る準備を進めながら、腕のいい弟子を探していた。

「紳士服って何だ？」

少年には馴染みのない言葉だった。農村で育った彼が見慣れているのは、作業着や和服ばかり。洋服といっても、学生服くらいしか知らなかった。

「男の人が着る背広を作る仕事だ」

母が説明してくれたが、それでもピンとこなかった。しかし、手に職をつけることができるなら、悪い話ではない。

「やってみるか？」

父の言葉に、少年は頷いた。他に選択肢があるわけでもなかった。

数日後、少年は両親と一緒にその職人の元を訪れた。小柄で物静かな男性だった。戦争で故郷を離れることになったが、技術だけは失わなかった。東京に戻ったら、また仕立て屋として生計を立てるつもりだった。

「厳しい世界だぞ」

職人は少年の顔をじっと見つめて言った。

「覚悟はあるか？」

「はい」

少年は緊張しながらも、はっきりと答えた。

「よし、では一緒に東京に行こう」

こうして、昭和十六年の春、十五歳の少年は故郷を離れることになった。

出発の日、家族総出で見送りに出た。

「体だけは気をつけろよ」

父の言葉に、少年は涙をこらえて頷いた。母は黙って弁当を手渡してくれた。いつものように芋が入っていたが、この日ばかりは文句を言う気にはなれなかった。

「必ず一人前になって帰ってくるからな」

兄弟たちに別れを告げ、少年は師匠と共に東京行きの汽車に乗った。

汽車の窓から見える景色は、だんだんと都会らしくなっていった。田んぼや畠が減り、建物が増えてくる。上野駅に着いた時、少年は東京の大きさに圧倒された。

「ここが東京か…」

戦争で焼け野原になったとは聞いていたが、それでも故郷とは比べ物にならない賑わいだった。人々が忙しそうに行き交い、汽車や電車が頻繁に行き来している。

師匠に連れられて向かったのは、荒川区にある小さな仕立て屋だった。

「ここがお前の新しい家だ」

二階建ての古い建物。一階が作業場で、二階が住居になっていた。作業場には五人ほどの職人が働いていた。みんな真剣な表情で、黙々と針を動かしている。

「親方、新しい子ですか？」

職人の一人が顔を上げて言った。

「ああ、田舎から来た。よろしく頼む」

親方は職人たちに少年を紹介した。親方というのは、この仕立て屋の主人だった。師匠はここで働くことになり、少年はその見習いとして修行することになった。

「お前はここで寝起きするんだ」

作業場の片隅に、布団を敷くスペースがあった。プライバシーなど期待できない。仕事が終わったら片付けをして、そこに布団を敷いて寝る。朝起きたら、また布団を片付けて仕事の準備をする。

「明日から頑張れよ」

師匠に声をかけられて、少年は不安と期待の入り混じった気持ちで床についた。

翌朝、少年の新しい生活が始まった。

朝は五時に起床。まず掃除から始まる。作業場の床を箒で掃き、雑巾で拭く。職人たちが使う道具を整理整頓する。お茶の準備もする。

「おい、新人！」

親方の声が響く。親方は口うるさく、少しでも気に入らないことがあると、厳しく叱りつけた。

「何をぐずぐずしてるんだ！」

仕事は朝八時から夜十時まで。途中で休憩はあるが、基本的にはずっと働きっぱなしだった。最初は雑用ばかり。糸くずを集めたり、布を運んだり、職人たちのお使いをしたり。

「いつになつたら針を持たせてもらえるんだろう」

少年は心の中でつぶやいた。しかし、そんな甘い考えは通用しなかった。

「見習いが何を偉そうに」

職人の一人に叱られて、少年は黙って雑用を続けた。

月に一度の休みは、第三日曜日だった。その日だけは、朝からゆっくりできた。休日になると、少年は王子まで足を延ばした。そこには映画館が三軒あり、安い料金で映画を見ることができた。

「二十円で映画が見られるなんて」

故郷にはなかった娯楽に、少年は夢中になった。映画が終わると、近くの食堂で食事をして帰る。これが唯一の楽しみだった。

親方から貰える小遣いは、月に三千円だった。現在の価値で考えれば、本当にわずかな額だった。食事と寝る場所は提供されるが、それ以外は自分で何とかしなければならない。

「金なんてあるわけないだろう」

王子には花街もあったが、少年には縁のない世界だった。高くて手が出せない。それに、まだ十五歳の少年には、そんな場所は敷居が高すぎた。

仕事は想像以上に厳しかった。親方は少しでも気に入らないことがあると、容赦なく怒鳴りつけた。

「そんなこともできないのか！」

理不尽に思えることもあったが、文句を言える立場ではなかった。家族に迷惑をかけるわけにはいかない。歯を食いしばって耐えるしかなかった。

そんな中、昭和二十年八月十五日がやってきた。

正午のサイレンが鳴り、ラジオから天皇陛下の声が流れた。作業場の全員が手を止めて、放送に聞き入った。

「戦争が終わった…」

親方が呟いた。そして、職人たちが一斉に泣き始めた。

少年は故郷で見た光景を思い出した。あの時と同じように、大人たちが泣いている。今度は理由がわかった。長い戦争が終わり、平和が戻ってきたのだ。

「これからは、もっといい時代になるぞ」

親方が涙を拭いながら言った。確かに、空襲の心配はなくなった。しかし、少年の厳しい修行生活は続いた。

戦後の混乱期、材料の調達も困難だった。ラシャという高級な毛織物は手に入らず、代わりに綿を使って背広を作ることもあった。糸も不足していた。

「何もかも足りないな」

職人たちは嘆いていたが、それでも仕事は続けなければならなかった。お客様は背広を求めていた。限られた材料で、最高の仕事をする。それが職人の誇りだった。

「お前も早く一人前になれよ」

師匠が時々、少年に声をかけてくれた。故郷から一緒に出てきた師匠だけが、少年の心の支えだった。

「五年で一人前になれるそうです」

少年は師匠に言った。

「そうだ。その後、三年は恩返しの奉公をするんだ」

長い道のりだった。しかし、少年は諦めなかった。いつか必ず一人前の職人になって、故郷に錦を飾る。その日を夢見て、厳しい修行に耐え続けた。

荒川区の小さな仕立て屋で、少年の職人人生が始まった。雑用から始まり、やがて針を持ち、布を裁き、背広を縫う。その技術を身につけるまでには、まだまだ長い時間がかかりそうだった。

それでも、少年は前を向いていた。故郷で見た東京の空の赤い炎。戦争という時代の激動。そして今、平和な時代の始まり。激動の時代を生きる少年にとって、職人への道は希望の光だった。

第3章 一人前になるまでの成長過程

修行を始めて一年が過ぎた頃、ようやく少年は針を持たせてもらえるようになった。

「まずはボタン付けからだ」

職人の一人が、古い背広を差し出した。取れかかったボタンを付け直す、単純な作業だった。しかし、初めて針を持った少年の手は震えていた。

「何をびくびくしてるんだ。ただのボタンじゃないか」

職人の冷たい言葉に、少年は唇を噛んだ。しかし、実際にやってみると、思うようにいかなかつた。針が指に刺さり、血が出た。糸がもつれて、何度もやり直しになつた。

「こんなこともできないのか」

親方の厳しい声が作業場に響いた。少年は必死に手を動かしたが、他の職人たちの足手まといになるばかりだった。

「情けない」

心の中で自分を責めながらも、少年は諦めなかつた。夜、みんなが寝静まってから、こっそり練習した。古い布切れを使って、何度も何度もボタン付けを繰り返した。

一ヶ月ほどして、ようやくボタン付けがまともにできるようになった。次は簡単な縫い目の練習だった。

「直線を真っ直ぐ縫えるようになってから出直してこい」

職人たちは容赦なかつた。少年は毎日、布に線を引いて、その上を正確に縫う練習を続けた。手が腱鞘炎になりそうなほど、針を握り続けた。

二年目に入ると、既製品の一部を任されるようになった。袖口の始末や、裾上げといった単純な作業だった。

「既製品は分業なんだ」

師匠が説明してくれた。

「一人の職人が一着全部を作るわけじゃない。それぞれが担当する部分だけを縫つていいく」

確かに効率的だった。しかし、少年は物足りなさを感じていた。

「これじゃあ、腕が上がらない」

同じことの繰り返しでは、技術は向上しない。裁断も型紙起こしも、他の職人がやってしまう。見習いの少年には、単純作業しか回ってこなかった。

「焦るな」

師匠が声をかけてくれた。

「みんな同じ道を通ってきたんだ。お前だけじゃない」

三年目になると、ようやくミシンを使わせてもらえるようになった。足踏み式の古いミシンだったが、少年には宝物のように思えた。

「最初はゆっくりでいい。慣れてから速度を上げろ」

職人に教わりながら、少年は恐る恐るミシンを踏んだ。最初はペダルの感覚がわからず、針が暴走することもあった。布を破いてしまい、親方に怒鳴られることもしばしばだった。

「下手くそ！ 材料を無駄にするな！」

親方の雷が落ちると、作業場の空気が凍りついた。少年は縮こまりながら、謝罪の言葉を繰り返した。

それでも、少年は諦めなかった。休憩時間や夜中に、こっそりミシンの練習をした。古い布を使って、直線縫いから曲線縫いまで、あらゆるパターンを練習した。

四年目に入ると、少年の技術は格段に向上していた。ミシンも手縫いも、一通りこなせるようになった。同期の見習いと比べても、決して劣らない腕前だった。

「そろそろ本格的な仕事を覚えさせてやろう」

親方がそう言ったのは、修行を始めて四年半が過ぎた頃だった。初めて、一着の背広を最初から最後まで作らせてもらえることになった。

「これはお前のテストだ」

親方が一枚の型紙を渡した。

「失敗したら、また一からやり直しからな」

少年の心臓は激しく鼓動した。これまでの修行の集大成だった。採寸から裁断、縫製、仕上げまで、すべて一人でやらなければならない。

お客様は近所の商店主だった。体型に特徴があり、既製品では合わないということで、注文服を頼んできた。

「よろしくお願いします」

少年は緊張しながら、採寸テープを手に取った。肩幅、胸囲、胴囲、袖丈、着丈…。一つ一つ丁寧に測っていく。師匠が横で見守ってくれていたが、実際に手を動かすのは少年だった。

採寸が終わると、次は型紙作りだった。お客様の体型に合わせて、既存の型紙を修正していく。肩が下がり気味で、お腹が出ている。そんな体型に合うように、慎重に調整した。

「型紙が間違っていたら、すべてが台無しになる」

師匠の言葉を胸に刻んで、少年は何度も確認した。

裁断は最も緊張する作業だった。高価な生地に鋏を入れる瞬間、手が震えた。一度切ってしまったら、やり直しはきかない。

「落ち着け」

自分に言い聞かせながら、慎重に鋏を進めた。背中に汗をかきながら、一枚一枚の部品を切り出していく。

縫製に入ると、少年の手は自然に動いた。四年間の修行で身につけた技術が、無意識のうちに発揮された。ミシンの音が規則正しく響き、布と布が確実に縫い合わされていく。

細かい部分は手縫いだった。襟や袖口、ボタンホールなど、丁寧な手仕事が要求される部分だった。夜遅くまで、少年は針を動かし続けた。

一週間後、ついに背広が完成した。

「できました」

少年が親方に報告すると、親方は黙って背広を手に取った。表地から裏地まで、細部にわたって厳しくチェックしていく。

「…合格だ」

親方の口から出た言葉に、少年は安堵した。四年半の修行が、ようやく実を結んだ瞬間だった。

お客様が試着に来た時、背広は完璧にフィットした。

「素晴らしい出来栄えですね」

お客様の満足そうな笑顔を見て、少年は職人としての喜びを初めて味わった。

「お前も一人前に近づいたな」

師匠が声をかけてくれた。しかし、まだ修行は終わりではなかった。

五年目になると、少年はほぼ独立した職人として扱われるようになった。お客様との打ち合わせから納品まで、一人で担当することもあった。

「これで一人前だ」

修行開始から丸五年が経った日、親方が正式に認めてくれた。しかし、すぐに独立できるわけではなかった。

「今度は三年間、恩返しの奉公をしてもらう」

これは昔からの慣習だった。五年間、技術を教えてもらった恩を、三年間の労働で返すのだ。給料は相変わらず雀の涙ほどだったが、少年は文句を言わなかった。

恩返し奉公の間、少年の技術はさらに向上した。難しい注文にも対応できるようになり、お客様からの信頼も厚くなった。

「君に作ってもらった背広は、本当に着心地がいい」

そんな言葉をかけてもらえると、すべての苦労が報われた気がした。

休日の楽しみも変わっていた。王子の映画館は相変わらず通っていたが、今度は一人で行くのではなく、同じ年頃の職人仲間と連れ立って出かけることが多くなった。

「今度、新しい映画が入るらしいぞ」

「それは見に行かなくちゃな」

映画の後は、近くの食堂で食事をして帰る。わずかな小遣いの中から捻出する贅沢だったが、一週間の疲れを癒す大切な時間だった。

花街にも、時々足を向けることがあった。といっても、まだ高嶺の花だった。入り口で眺めるだけで、実際に中に入ることはなかった。

「いつかは…」

そんな淡い憧れを抱きながら、少年は青年へと成長していった。

八年間の修行と奉公を終えた時、二十三歳になっていた。技術も人格も、一人前の職人として認められる水準に達していた。

「よく頑張ったな」

親方が労いの言葉をかけてくれた。師匠も満足そうに頷いていた。

「これからは自分の道を歩め」

長い修行期間を支えてくれた師匠の言葉に、青年は深く頭を下げた。故郷を出て八年。十五歳の少年は、立派な職人に成長していた。

しかし、一人前になったとはいえる、まだ学ぶべきことはたくさんあった。既製品ばかり作っていては、本当の技術は身につかない。注文服の世界で勝負するためには、さらなる修行が必要だった。

「裁断と型紙をもっと勉強したい」

青年は新たな目標を定めた。一人前の職人として認められたのは、まだスタートラインに立ったに過ぎなかった。本当の職人人生は、これから始まるのだった。

荒川区の小さな仕立て屋で過ごした八年間。厳しい修行の日々だったが、確実に技術と精神力を身につけることができた。あの十五歳の少年が、今や一人前の職人として認められている。故郷の家族も、きっと誇らしく思ってくれるだろう。

次は独立への道筋を考える時が来ていた。

第4章 独立と結婚という人生の転機

恩返し奉公を終えた二十三歳の青年は、人生の岐路に立っていた。このまま親方の元で働き続けるか、それとも独立の道を選ぶか。

「お前はどうするつもりだ？」

師匠が問いかけた。同じように修行を積んだ職人の中にも、様々な選択をする者がいた。独立して自分の店を構える者もいれば、安定を求めてそのまま残る者もいた。

「向き不向きがあるからな」

師匠の言葉通りだった。独立には技術だけでなく、商売の才覚も必要だった。お客様を見つけ、信頼関係を築き、経営を軌道に乗せる。簡単なことではなかった。

「僕は独立したいです」

青年ははっきりと答えた。八年間の修行で身につけた技術を、もっと活かしたかった。既製品の分業制では、どうしても限界があった。

「そうか。なら、もう少し勉強が必要だな」

師匠は頷いた。

「裁断と型紙を一から覚え直せ。そうでなければ、注文服の世界では通用しない」

確かにその通りだった。既製品では、裁断も型紙起こしも専門の職人が担当していた。しかし、独立して注文服を手がけるなら、すべて一人でこなさなければならない。

「東長崎に『上海テーラー』という店がある」

師匠が教えてくれた。

「そこの親方は腕がいい。裁断と型紙のことなら、何でも知っている」

上海テーラー。不思議な名前だった。

「上海でやっていた会社が、戦争で日本に引き揚げてきたんだ」

師匠の説明で納得した。戦争の混乱で、多くの人が故郷を離れることになった。技術者たちも例外ではなかった。

数日後、青年は東長崎を訪れた。上海テーラーは、思っていたより大きな店だった。中国風の看板が印象的で、店内には独特的な雰囲気があった。

「君が荒川の仕立て屋から来た子か」

親方は中年の男性だった。上海で長年、高級注文服を手がけてきたという。戦争で日本に戻ったが、技術と経験は一流だった。

「裁断と型紙を教えてもらえませんか」

青年の頼みに、親方は少し考えてから答えた。

「三年はかかるぞ。それでもいいか？」

「はい、お願ひします」

こうして青年は、新たな修行の場を得ることになった。

上海テーラーでの仕事は、これまでとは全く違っていた。一人のお客さんのために、採寸から型紙起こし、裁断、縫製、仕上げまで、すべてを一貫して行う。既製品とは比較にならない、高度な技術が要求された。

「型紙が命だ」

親方は何度も繰り返した。

「型紙が一ミリでも狂えば、すべてが台無しになる」

お客様の体型は千差万別だった。肩が下がっている人、お腹が出ている人、背中が曲がっている人。それぞれの特徴に合わせて、型紙を調整しなければならない。

最初は基本的な型紙の作り方から教わった。平面の紙を、立体的な人間の体に合わせて設計する。数学的な計算と、長年の経験がものを言う世界だった。

「頭で考えるだけじゃダメだ」

親方は青年に実際に作らせながら指導した。

「手で覚えろ。体で覚えろ」

裁断も同様だった。高価な生地を無駄にするわけにはいかない。一回の裁断で決まってしまう。やり直しはきかない。

「緊張するな。でも、慎重にやれ」

親方の言葉は矛盾しているようだったが、青年には理解できた。技術に裏打ちされた自信があれば、緊張せずに慎重な作業ができる。

一年が過ぎた頃、青年の技術は格段に向上していた。型紙起こしも裁断も、一通りこなせるようになった。しかし、まだまだ親方の域には達していなかった。

「焦るな。技術は一日では身につかない」

親方は励ましてくれた。上海で何十年も修行を積んだ親方と、まだ一年の青年では、差があつて当然だった。

二年目に入ると、青年は難しい注文も任されるようになった。体型に癖のあるお客様や、特殊な要求をするお客様の服も作った。

そんな中、青年に大きな変化が訪れた。

「娘を紹介したい」

親方が突然、そんなことを言い出した。青年は戸惑った。

「まだ結婚なんて考えていません」

「いや、一度会ってみろ」

親方は聞く耳を持たなかった。

数日後、親方の家に招かれた青年は、そこで一人の女性と出会った。親方の娘さんだった。青年より一つ年下の、清楚な女性だった。

「この人が例の職人さんですか」

彼女の第一声だった。親方から話は聞いていたらしい。

「よろしくお願ひします」

青年は緊張しながら挨拶した。

それから何度か、親方の家で顔を合わせるようになった。最初は親方が仲立ちをしていたが、だんだんと二人で話をするようになった。

「お父さんから聞きました。とても真面目に仕事をしていらっしゃるそうですね」

彼女は青年の仕事ぶりを知っていた。親方が家で話していたのだろう。

「まだまだ勉強中です」

青年は謙遜したが、内心では嬉しかった。自分の仕事を理解してくれる人がいることが。

彼女も仕立ての仕事を手伝っていた。主に既製品の簡単な作業だったが、針仕事は得意だった。

「女性の方が、細かい手仕事は向いているのかもしれませんね」

青年の言葉に、彼女は微笑んだ。

「お役に立てるでしょうか」

「きっと」

二人の距離は、少しずつ縮まっていった。

親方が結婚を勧めるのには、理由があった。青年の技術と人格を信頼していたのだ。娘を任せても大丈夫だと判断していた。

「お前なら安心だ」

親方は青年に言った。

「娘をよろしく頼む」

青年が二十五歳、彼女が二十四歳の時、二人は結婚した。昭和三十四年のことだった。

結婚式は質素だったが、心のこもった温かいものだった。青年の故郷からも家族が駆けつけてくれた。

「立派になったな」

久しぶりに会った父親が、感慨深そうに言った。十五歳で故郷を離れた息子が、今や一人前の職人として、妻を迎えることになった。

「ありがとうございました」

青年は両親に深く頭を下げた。故郷で育ててもらった恩は、一生忘れる事はないだろう。

結婚を機に、青年は本格的な独立を決意した。上海テーラーで三年間の修行を積み、裁断と型紙の技術を身につけた。妻になった彼女も、仕事を手伝ってくれることになった。

「二人で頑張りましょう」

妻の言葉に、青年は力強く頷いた。

最初は親方から客を紹介してもらった。上海テーラーで信頼関係を築いたお客様の中には、青年の腕を評価してくれる人もいた。

「君に作ってもらいたい」

そんな言葉をかけてもらえると、青年は感激した。技術だけでなく、人としても認められたということだった。

新婚の二人は、小さなアパートの一室で仕立て屋を始めた。設備は最低限だったが、やる気だけは人一倍あった。

妻は既製品の経験を活かして、簡単な作業を担当してくれた。ボタン付けや裾上げ、仕上げのアイロンがけなど、青年一人では手が回らない部分をサポートしてくれた。

「助かります」

青年は心から感謝していた。技術的な面だけでなく、精神的な支えにもなってくれていた。

独立して一年が過ぎた頃、二人に第一子が生まれた。男の子だった。

「跡継ぎができたな」

親方が冗談めかして言ったが、青年は複雑な気持ちだった。息子には、もっと違う道を歩んでほしいという思いもあった。

その後、年子でもう一人男の子が生まれ、さらに三人目も男の子だった。三人の息子を抱えた青年は、ますます仕事に励むようになった。

「家族を養わなければ」

その责任感が、青年をさらに成長させた。技術も商売も、以前より真剣に取り組むようになった。

独立から数年が経つと、青年の評判は次第に広まっていた。丁寧な仕事ぶりと、お客様への誠実な対応が口コミで広がり、新しい客が次々と訪れるようになった。

「腕のいい職人がいる」

そんな評価をもらえるようになったのは、長年の修行と、妻の支えがあったからだった。

二十五歳で結婚し、三人の息子に恵まれた青年。職人としても夫としても父親としても、充実した日々を送っていた。独立への不安は、いつの間にか自信に変わっていた。

これから先、どんな困難が待ち受けているかはわからない。しかし、家族という支えがある限り、どんなことでも乗り越えられそうな気がしていた。

上海テーラーで学んだ技術を武器に、青年の本格的な職人人生が始まった。

第5章 職人として最も充実した時期

独立して五年が過ぎた頃、思わぬ話が舞い込んできた。

「参議院議員の洋服を作つてみないか？」

上海テーラーの親方の紹介だった。親方のお客さんの中に、政界に顔の利く社長がいた。その人が青年の腕前を聞いて、推薦してくれたのだった。

「議員会館に店を構えることになる」

詳しい話を聞くと、参議院議員会館の中に、専用の仕立て屋として入ることになるという。

「そんな大それたこと、僕にできるでしょうか」

青年は不安だった。これまで相手にしてきたのは、町の商店主や会社員ばかりだった。国會議員というと、雲の上の人のような存在だった。

「腕は確かだ。心配いらない」

親方が背中を押してくれた。

「代議士の先生方は、案外細かくない。むしろやりやすいかもしないぞ」

妻も賛成してくれた。

「せっかくの機会です。やってみましょう」

三人の息子を抱えて、収入を安定させたいという思いもあった。

こうして青年は、参議院議員会館で仕事をすることになった。

最初に議員会館を訪れた時、青年は建物の立派さに圧倒された。大理石の床に高い天井、重厚な雰囲気が漂っていた。

「ここで仕事をするのか…」

緊張で手に汗をかいた。

しかし、入り口で早速問題が起きた。

「君は何の用事で来たんだ？」

警備員に呼び止められた。青年は慌てて説明した。

「仕立て屋として働くことになりました」

「仕立て屋？聞いてないな」

警備員は疑わしそうな目で青年を見た。作業着を着た青年は、確かに怪しく見えたかもしれない。

「不審者かもしれません」

別の警備員も寄ってきた。青年は必死に説明したが、なかなか信じてもらえなかつた。

「紹介者の社長に連絡を取ってください」

ようやく事情が確認され、青年は中に入ることができた。しかし、この後も同じようなことが何度も起きた。

「また不審者扱いされた」

家に帰って妻に愚痴をこぼすことも多かった。

「大変ですね。でも、だんだん慣れてもらえますよ」

妻の励ましに支えられて、青年は頑張り続けた。

議員会館での仕事は、確かに親方の言う通りだった。代議士の先生方は、細かいことにはあまりこだわらなかった。

「君に任せるよ」

そう言って、採寸の後は青年の判断に委ねてくれることが多かった。町の商店主の方が、よほど細かい注文をつけてきた。

「袖の長さをもう少し短く」

「ポケットの位置を変えて」

議員の先生方からは、そんな要求はほとんどなかった。忙しい公務の合間を縫って来るので、手早く済ませたいのだろう。

採寸から納品まで、一週間で仕上げるのが基本だった。

月曜日に採寸して、火曜日に型紙を起こし、水曜日に裁断。木曜日と金曜日で縫製を進め、土曜日に仮縫いをして最終調整。日曜日に仕上げて、翌週の月曜日に納品する。

このスケジュールを維持するために、青年は休む暇もなく働いた。基本的に一度に一着しか作らなかったが、急ぎの注文が重なることもあった。

「明日までに頼む」

そんな無理な要求をされることもあったが、青年は断らなかった。政治家の先生方は、急な予定変更が多い。明日の会議に新しいスーツで出席したい、そんなこともあった。

「徹夜でやります」

青年は妻と一緒に、夜通し作業することもあった。妻は既製品の経験を活かして、ボタン付けや仕上げのアイロンがけを担当してくれた。

「助かります」

青年は心から感謝していた。一人では到底こなせない仕事量だった。

議員会館で働くようになって、青年の技術はさらに向上した。様々なタイプの体型の人に対応することで、型紙作りや裁断の腕が上がった。

また、高級な生地を扱う機会も増えた。上質なウールやカシミア、シルクの裏地など、今まで使ったことのない素材も使うようになった。

神田のすだ町や人形町まで、反物を仕入れに行くのも楽しみの一つだった。

「いいラシャが入りましたよ」

問屋の主人が声をかけてくれると、青年は目を輝かせた。生地選びも職人の大切な仕事だった。お客様の好みや用途に合わせて、最適な生地を選ぶ。

「この色なら、先生の肌に合いますね」

青年の提案に、議員の先生方も満足してくれることが多かった。

仕立て上がった服を着て、国会の本会議場に立つ議員の姿をテレビで見ることもあった。

「あのスーツ、僕が作ったんです」

妻に自慢げに話すと、妻も嬉しそうに笑ってくれた。

「立派ですね」

自分の作った服を着て、国政の場で活躍している人がいる。職人冥利に尽きる瞬間だった。

しかし、楽なことばかりではなかった。無理難題を言ってくる人もいた。

「この生地で、明日までに作れるか？」

物理的に不可能な要求をされることもあった。

「申し訳ございませんが、最低でも三日は…」

「何とかならないか？」

政治家特有の強引さに、青年は困り果てることもあった。

また、出来上がった後で文句を言わされることもあった。

「袖が長すぎる」

「肩がきつい」

実際に採寸した通りに作っているのに、理不尽な要求をされることもあった。

「直してくれ」

そう言われても、構造上直せない部分もある。青年は忍耐強く説明したが、理解してもらえないこともあった。

「お客様には内緒だけど、いまいちのものもあった」

後に青年が振り返って言うように、すべてが完璧にいくわけではなかった。時間に追われて、十分に納得のいく仕上がりにならないこともあった。

それでも、青年は手を抜くことはなかった。どんなに急いでいても、職人としてのプライドは捨てなかった。

「自分の名前で出す以上、責任を持つ」

そんな気持ちで、一着一着に魂を込めて作り続けた。

議員会館での仕事は三年続いた。その間、青年は数えきれないほどの背広を仕立てた。一週間に二着、三着作ることもあったので、年間百着を超えることもあった。

「よく頑張ったな」

三年後、青年は議員会館での仕事を終えることにした。体力的にも限界に近かった。

「引退だ」

まだ五十代半ばだったが、青年は職人としての区切りをつけることにした。目が悪くなってきて、細かい手仕事がつらくなっていた。

「お疲れさまでした」

議員の先生方からも、労いの言葉をかけてもらった。三年間で培った人間関係は、青年の財産になった。

家に帰ると、妻が温かく迎えてくれた。

「本当にお疲れさまでした」

三人の息子たちも、父親の頑張りを見ていてくれた。

「お父さんの作ったスーツ、テレビで見たよ」

長男がそう言ってくれた時、青年は胸が熱くなった。

議員会館での三年間は、確かに青年の職人人生で最も充実した時期だった。技術的にも精神的にも、大きく成長することができた。

高級な生地を扱い、一流の政治家を相手にする。そんな経験は、他では得られないものだった。

「いい経験をさせてもらった」

青年は心からそう思っていた。

もちろん苦労も多かった。不審者扱いされたり、無理難題を言われたり、理不尽な文句を言われたり。しかし、それらすべてが青年を成長させてくれた。

「職人は腕だけじゃダメだ。人間性も大切だ」

議員会館での経験を通して、青年はそのことを深く理解した。

技術があっても、お客様との信頼関係がなければ、良い仕事はできない。逆に、お客様から信頼されれば、多少の無理も聞いてもらえる。

「人と人とのつながりが、一番大切だ」

そんな当たり前のことを、青年は改めて実感した。

議員会館での仕事を終えた青年は、これから的人生をどう過ごすか考えていた。まだまだ働けるが、以前のような激務は体がもたない。

「ゆっくり、じっくりと仕事をしよう」

青年は新たな職人人生の方向性を見つけていた。量より質。そんな仕事のスタイルを目指そうと思った。

議員会館で培った経験と技術を武器に、青年の職人人生は新たな段階に入ろうとしていた。

第6章 技術と職人としての誇り

四十年間の職人人生を振り返ると、青年は一もはや熟練の職人と呼ぶべき男は、數えきれないほどの背広を作ってきた。

「一体何着作ったんだろうな」

妻に問い合わせても、正確な数字は分からなかった。議員会館での三年間だけでも、優に三百着は超えていた。その前の修行時代や独立してからの期間を含めると、おそらく千着を軽く上回っているだろう。

一着の背広を作るのに必要な工程を、彼は完璧に身につけていた。

まずは採寸。お客様の体に巻尺を当てて、正確に寸法を測る。肩幅、胸囲、胴囲、袖丈、着丈。しかし、数字だけでは表せない部分もある。

「この人は右肩が下がっているな」

「お腹が出ているから、ここを調整しよう」

長年の経験で培った観察眼が、数字以上の情報を読み取る。

次は型紙起こし。お客様の体型に合わせて、基本の型紙を修正していく。一ミリの狂いも許されない、最も神経を使う作業だった。

「型紙が命だ」

上海テーラーの親方の言葉が、今でも耳に残っている。どんなに縫製が上手でも、型紙が悪ければ台無しになる。

型紙ができると、いよいよ裁断だった。高価な生地に鋏を入れる瞬間、今でも緊張した。一度切ってしまったら、やり直しはきかない。

「落ち着いて、でも慎重に」

自分に言い聞かせながら、確実に鋏を進める。この瞬間の集中力は、四十年経っても変わらなかった。

裁断が終わると、縫製に入る。まずは仮縫い。大まかに形を作つて、お客様に試着してもらう。

「少しきついかもしれません」

「袖が長いようですね」

お客様の感想を聞きながら、微調整を加えていく。既製品では絶対に味わえない、注文服ならではの工程だった。

本縫いは、職人の技術が最も発揮される場面だった。ミシンで大まかな部分を縫い、細かい部分は手縫いで仕上げる。

襟の部分は特に難しかった。立体的な首の形に合わせて、平面の布を美しく仕上げなければならない。何度も何度も練習した技術が、ここで活かされる。

袖つけも重要な工程だった。腕の動きを妨げず、かつ美しいシルエットを作る。機械的にやるのではなく、その人の体型や職業を考慮して調整する。

「この方はデスクワークが多いから、前側を少しゆったりめに」

「この方は営業で歩き回るから、動きやすさを重視しよう」

一人一人に合わせた細やかな配慮が、注文服の真骨頂だった。

ボタンホールは、最も繊細な手作業だった。機械で開けることもできるが、やはり手縫いの方が美しい仕上がりになる。

「ボタンホールを見れば、職人の腕が分かる」

先輩職人の言葉通り、ここで手抜きをするわけにはいかなかった。

最後の仕上げは、専門の仕上げ屋に任せることもあった。アイロンがけは、見た目を大きく左右する重要な工程だった。

「お疲れさまでした」

仕上げ屋から背広を受け取る時、職人は毎回達成感を味わった。また一着、完成了。

そして納品。お客様が試着して、満足そうな表情を浮かべる瞬間が、職人にとって最高の報酬だった。

「素晴らしい出来栄えですね」

「着心地がとてもいいです」

そんな言葉をもらえると、すべての苦労が報われた。

しかし、すべてが順調に行くわけではなかった。

「お客様には内緒だけど、いまいちのものもあった」

職人は正直に振り返った。時間に追われて、十分な仕上がりにならないこともあった。生地の特性を読み違えて、思うような仕上がりにならないこともあった。

「無理難題もいっぱいあった」

「明日までに作ってくれ」という無茶な要求。「この生地で背広ができるか」という無謀な挑戦。職人は断ることもできたが、できる限り応えようとした。

「いちやもんつける人もいた」

明らかに職人の技術ではなく、お客様自身の体型変化や勘違いによるクレームもあった。しかし、職人は黙って直した。

「できた後にあれ直せこれ直せもある」

構造上、直すのが困難な部分もあった。しかし、お客様の満足のためなら、可能な限り対応した。

「でももうあまり直せない」

限界もあった。背広の基本構造を崩してまで直すのは、かえって着心地を悪くすることもあった。

既製品と注文服の違いを、職人は身をもって体験していた。

「既製品の場合はいっぱい作る」

大量生産の既製品は、効率が最優先だった。一人の職人が一つの工程だけを担当して、流れ作業で作っていく。

「腕が上がらない」

分業制では、全体の技術は身につかない。裁断だけ、縫製だけ、仕上げだけ。それぞれは上達するが、一着を通して作る技術は身につかない。

「裁断できない。型紙を起こすのもできない」

既製品の職人の多くは、そんな状態だった。

一方、注文服は一人の職人が最初から最後まで担当する。

「独立して既製品をやめて、全部一通りやった」

採寸から納品まで、すべての責任を負う。大変だが、やりがいもあった。

「注文服を着ると他のものは着れなくなる」

職人自身が、そのことを実感していた。自分で作った服の着心地の良さは、既製品では絶対に味わえない。

「引退しても自分で作ったものを自分で着ている」

職人のクローゼットには、自分で仕立てた背広が何着もかかっていた。十年前に作ったものでも、体にぴったりと合って、今でも現役だった。

しかし、家族には作らなかった。

「息子には作ったことがない」

三人の息子がいたが、一着も仕立てたことがなかった。

「なぜならお金にならないから」

職人の答えは現実的だった。家族のために働いてきた四十年間。時間をかけて家族の服を作るより、お客様の注文をこなして収入を得る方が大切だった。

それでも、家族は職人の仕事を理解してくれていた。

「奥さんも洋服作りを手伝ってくれた」

特に既製品の時代は、妻の協力が欠かせなかった。ボタン付けや仕上げのアイロンがけ、簡単な縫製も手伝ってくれた。

「色々やってもらった」

一人では到底こなせない仕事量を、夫婦二人三脚で乗り切った。

職人の世界は厳しかった。

「60-65歳までやってる人もいたが、目が悪くなってやめていく」

手先の仕事だけに、視力の衰えは致命的だった。針の穴に糸を通すのも、細かい縫い目を確認するのも、すべて目に頼っていた。

「自分の腕だけでやってきた」

機械に頼らず、人間の手と目と経験だけが頼りだった。だからこそ、体の衰えとともに限界が訪れる。

それでも、四十年間続けてこられたのは、職人としての誇りがあったからだった。

「数えきれないぐらい洋服を作ってきた」

一着一着に、職人の魂が込められていた。お客様の喜ぶ顔を思い浮かべながら、手を動かし続けた四十年間だった。

戦後の混乱期から高度経済成長期まで、激動の時代を職人として生きてきた。材料が不足していた時代も、豊かになって高級な生地が手に入るようになった時代も、一貫して「いいものを作る」という姿勢を貫いてきた。

「戦争中はラシャがなくて、綿で作ってた」

「糸も全然なかった。何もかも無くなつた」

そんな時代から、議員会館で最高級の生地を扱う時代まで。職人は時代の変化を肌で感じながら、技術を磨き続けてきた。

「現代はとても恵まれている」

豊富な材料、優れた道具、安定した環境。今の職人たちは、恵まれた環境で仕事ができる。

しかし、だからこそ失われているものもあるかもしれない。何もない中から工夫して、限られた材料で最高の仕事をする。そんな職人魂は、豊かな時代には生まれにくい。

「なんもあるし」

今の時代への感想だった。しかし、それは批判ではなく、感謝の気持ちだった。苦労の多い時代を生きてきたからこそ、今の豊かさのありがたみが分かる。

四十年間の職人人生を通して、男は確かな技術と揺るぎない誇りを手に入れた。数えきれない背広の一着一着が、彼の人生そのものだった。

ミシンの音、針を刺す感触、完成した時の達成感。それらすべてが、職人としての彼を形作っていた。

「腕だけでやってきた」

その言葉には、四十年間の重みが込められていた。

第7章 引退後の生活

五十五歳で職人としての現役生活を終えた時、男は複雑な気持ちだった。

「もうやめる」

そう決めた時、四十年間の職人人生が走馬灯のように頭を駆け巡った。十五歳で故郷を離れ、荒川区の小さな仕立て屋で雑用から始めた日々。必死に技術を覚え、一人前の職人として認められるまでの長い道のり。そして議員会館での充実した三年間。

「目が悪くなってしまって」

引退の理由は明確だった。職人にとって目は命だった。細かい縫い目を確認したり、針の穴に糸を通したり、すべてが目に頼った作業だった。老眼が進み、小さな文字も見えにくくなつた。

「これ以上は無理だ」

プライドの高い職人だからこそ、中途半端な仕事はできなかつた。お客さんに満足してもらえないかもしれない服を作るくらいなら、潔く身を引く方がいい。

妻は最初、心配そうな顔をしていた。

「本当にやめてしまうんですか？」

四十年間、夫婦二人三脚で頑張ってきた仕事だった。妻にとっても、人生の大きな部分を占めていた。

「ああ、もう十分だ」

男の決意は固かつた。

「これからはゆっくりしよう」

最初の頃は、手持ち無沙汰だった。四十年間、休みなく働き続けてきた体が、突然の自由時間に戸惑っていた。

朝起きても、やることがない。以前なら、この時間には既に採寸の準備をしていたり、前日の続きの縫製をしていたりした。

「今日は何をしようかな」

そんな贅沢な悩みを抱えるようになった。

最初に始めたのは、散歩だった。

「体を動かさないと、なまってしまう」

近所をぶらぶら歩くことから始めて、だんだんと足を延ばすようになった。今まで仕事に追われて気づかなかった季節の変化や、街の移り変わりを発見した。

「桜がこんなにきれいだったんだな」

春になると、近くの公園の桜を見に行くのが楽しみになった。平日の昼間だったので、人も少なくゆっくりと楽しめた。

夏は早朝の散歩が気持ちよかったです。まだ暑くなる前の清々しい空気を吸いながら、一時間ほど歩く。汗をかいて家に帰ると、妻が冷たい麦茶を用意してくれていた。

秋は紅葉を見に、少し遠出することもあった。電車に乗って山に出かけ、美しい景色を眺める。そんな贅沢ができるのも、引退したからこそだった。

冬は寒いので、散歩の時間は短くなかった。その代わり、家の中で別の楽しみを見つけた。

「カラオケでもやってみようか」

妻の提案で、近所のカラオケボックスに通うようになった。最初は恥ずかしかったが、だんだん楽しくなってきた。

「昔の歌を歌うと、その頃のことを思い出すな」

戦後の復興期に流行った歌、高度経済成長期の明るい歌。それぞれの時代の思い出が蘇ってきた。

妻と一緒にデュエットすることもあった。若い頃は忙しくて、こんなに一緒に過ごす時間はなかった。

「今さらだけど、新婚旅行みたいですね」

妻の言葉に、男は照れくさそうに笑った。

引退してから、改めて妻への感謝の気持ちが深まった。四十年間、文句も言わずに仕事を手伝ってくれた。夜遅くまで一緒に縫い物をして、早朝から起きて家事をこなしてくれた。

「ありがとう」

素直にその言葉が出るようになった。

息子たちも、それぞれ独立して家庭を持っていた。

「お父さん、元気でやってる？」

時々顔を見せに来てくれる息子たちを見ると、男は安堵した。みんな立派に育ってくれた。

「洋服は作らなかつたけど、いい息子たちに育つたな」

息子たちには一着も背広を作つてやらなかつた。お金にならないからというのが理由だったが、今思えば少し寂しい気もした。

「孫に何か作つてやろうか」

そんなことを考えることもあったが、もう針を持つ気にはなれなかつた。

引退後の楽しみは、他にもあった。読書もその一つだつた。

仕事をしている間は、本を読む時間などなかつた。しかし、引退してからは図書館に通うようになった。

時代小説が好きだつた。江戸時代の職人が主人公の話を読むと、自分の職人時代を思い出した。

「昔の職人も大変だつたんだな」

現代よりもずっと厳しい環境で、技術を磨き続けた先人たちの話に感動した。

テレビも、今まで以上によく見るようになった。ニュースを見て世の中の変化を知ったり、バラエティ番組を見て笑ったり。

「時間があるっていいもんだな」

そんなことを実感する日々だった。

しかし、時には寂しさを感じることもあった。

「何かやりがいのあることがしたいな」

散歩やカラオケだけでは、物足りない時もあった。四十年間、常に目標を持って働いてきた男にとって、目標のない生活は少し退屈に感じられることもあった。

そんな時、古い友人から連絡があった。

「久しぶりだな。元気でやってるか？」

同じ職人仲間だった男性だった。彼も既に引退していた。

「今度、みんなで集まろうか」

久しぶりに昔の仲間たちと会うことになった。みんな年を取っていたが、昔話に花が咲いた。

「あの頃は大変だったな」

「でも充実していた」

それぞれが、職人時代の思い出を語り合った。苦労話が多かったが、みんな満足そうな表情をしていた。

「いい人生だったよ」

誰かがそう言うと、みんな頷いた。

引退して数年が経つと、男の生活も安定してきた。朝の散歩、昼間の読書、夕方のテレビ、そして妻との会話。単調かもしれないが、平穀で充実した日々だった。

「悠々自適だな」

そんな言葉がぴったりの生活だった。

自分で作った背広を、今でも大切に着ていた。十年前、二十年前に作ったものでも、体にぴったりと合っていた。既製品では絶対に味わえない着心地の良さを、毎日実感していた。

「やっぱり注文服はいいな」

自分の技術への誇りは、引退しても変わらなかった。

時々、街で背広を着た人を見ると、職業病で品質をチェックしてしまうことがあった。

「あの背広は既製品だな」

「こっちは注文服だ」

長年の経験で、一目で分かった。

「俺の作った服の方がいい出来だな」

そんな自信は、今でも健在だった。

近所の人から、簡単な直しを頼まれることもあった。

「ちょっとボタンを付け直してもらえませんか？」

「裾上げをお願いします」

断る理由もないのに、快く引き受けていた。久しぶりに針を持つと、手が覚えていた。

「まだまだできるじゃないか」

そんな風に思うこともあったが、本格的に仕事を再開する気はなかった。

「十分やった」

その気持ちに変わりはなかった。

引退生活も何年も経ち、男は今、九十歳になっていた。体は衰えたが、精神はまだまだ元気だった。

「長生きしたもんだ」

十五歳で故郷を離れた時、まさか九十歳まで生きるとは思わなかった。戦争も経験し、食糧難の時代も乗り越えてきた。そして四十年間の職人人生を全うし、今は静かな老後を送っている。

「いい人生だった」

そう言い切れる自信があった。苦労も多かったが、やりがいもあった。家族にも恵まれ、技術も身につけることができた。

今でも時々、心残りがあることを思い出した。

「友達に誘われたけど、麻雀、パチンコとかやらなかつたこと」

子守で忙しくて、友達との付き合いを諦めることが多かった。今思えば、もう少し息抜きをしてもよかつたかもしれない。

「ゴルフをやってみたい」

今でもそんな気持ちがある。体力的には無理だろうが、一度はやってみたかった。

しかし、そんな小さな後悔があつても、全体的には満足していた。

「自分なりに精一杯やつた」

それが男の率直な感想だった。

妻と一緒に過ごす穏やかな日々。散歩とカラオケと読書のある生活。自分で作った背広を着て、昔の仲間と会う楽しみ。

引退後の生活も、それなりに充実していた。

職人として四十年、引退後も三十年以上。長い人生を振り返ると、それぞれの時期にそれぞれの価値があった。

厳しい修行時代があったからこそ、一人前の職人になれた。充実した現役時代があつたからこそ、安心して引退できた。そして今の穏やかな老後があるのも、それまでの人生があつてこそだった。

「すべてが繋がっているんだな」

そんなことを思いながら、男は今日も散歩に出かけていく。自分で作った背広に袖を通して、妻に「行ってきます」と声をかけて。

職人として生きた男の、静かで充実した引退後の生活が続いている。

エピローグ 人生全体の振り返り

九十歳の春、男は自宅の縁側に座り、庭の桜を眺めていた。

「今年も咲いたな」

毎年見ている桜だが、年を重ねるごとに美しさが心に染みるようになった。

妻が温かいお茶を持ってきてくれた。結婚してから六十五年、今でも変わらず面倒をてくれる。

「ありがとう」

自然に出る感謝の言葉。若い頃は照れくさくて言えなかつたが、今は素直に気持ちを表現できる。

桜を見ながら、男は長い人生を振り返っていた。

昭和九年、茨城県常総市大生郷に生まれて九十年。激動の時代を生き抜いてきた。

戦争の記憶は、今でも鮮明に残っている。高台から見た東京大空襲の赤い空。配給制度下での食糧不足。さつまいもばかりの食事。

「小さい頃はいもばっかり食べてた」

今思い出しても、あの頃の苦労は実感として残っている。

「食べ物に苦労した」

畑で野菜や米は作っていたが、お金がなくて他のものを手に入れるのが大変だった。戦争中、終戦後は配給だったから、お腹が空いても食べられなかつた。

「さつまいもはもう食べたくない」

それでも、家族の愛情に包まれて育つた。五人兄弟の真ん中で、時には喧嘩もしたが、困った時は助け合つた。瓦職人だった父の背中を見て、手に職をつける大切さを学んだ。

十五歳で故郷を離れた時のこと、昨日のことのように覚えている。

汽車の窓から見た茨城の田園風景。不安と期待が入り混じった気持ち。荒川区の小さな仕立て屋で始まった新しい生活。

「とても変化のある時代だった」

戦前、戦中、戦後の復興期、高度経済成長期。それぞれの時代に特有の苦労があり、喜びがあった。

職人としての四十年間は、男の人生の中核を成していた。

最初は雑用ばかりで、いつになつたら針を持たせてもらえるのかと焦った日々。朝八時から夜十時まで働いて、月一日の休み。厳しい修行に何度も挫けそうになった。

それでも諦めなかつたのは、故郷の家族を思う気持ちと、一人前の職人になりたいという夢があったからだった。

五年で一人前、その後三年の恩返し奉公。長い道のりだったが、確実に技術を身につけることができた。

東長崎の上海テーラーでの修行は、職人としてのターニングポイントだった。裁断と型紙の技術を学び、注文服の世界に足を踏み入れた。

そして結婚。親方の娘との出会いは、人生を大きく変えた。技術的なパートナーであり、人生のパートナーでもある妻との生活は、男に安定と充実をもたらした。

三人の息子たちの誕生は、父親としての責任感を強くした。家族を養うため、より一層仕事に励むようになった。

独立してからの苦労も多かった。お客様を見つけ、信頼関係を築き、経営を軌道に乗せる。技術だけでなく、商売の才覚も必要だった。

議員会館での三年間は、職人としての頂点を極めた時期だった。国会議員の背広を仕立て、政治の中核で活躍する人々を支えた。不審者扱いされた苦い経験もあったが、それも含めて貴重な思い出だった。

「数えきれないぐらい洋服を作ってきた」

一着一着に込めた思い。お客様の喜ぶ顔を見た時の達成感。時には理不尽な要求に応えなければならない苦労もあったが、それらすべてが職人としての誇りを形作っていた。

「苦労の多い人生だった」

それが男の率直な感想だった。

戦争による混乱、食糧不足、厳しい修行、家族を養う責任、目の衰えによる引退。人生の各段階で、それぞれ異なる困難があった。

しかし、苦労だけではなかった。

家族の愛情、師匠や親方からの指導、妻の支え、息子たちの成長、お客様からの信頼。多くの人々に支えられて、ここまで来ることができた。

技術を身につけて一人前の職人になれたこと。家族を養い、息子たちを立派に育てることができたこと。そして今、穏やかな老後を過ごせていること。

「いい人生だったか？」

自分に問いかけてみても、答えは明確だった。

苦労は多かったが、やりがいもあった。困難な時期もあったが、それを乗り越えることで成長できた。完璧ではなかったかもしれないが、自分なりに精一杯生きてきた。

「現代はとても恵まれている」

今の時代を見ると、つくづくそう思う。食べ物はあり余るほどあり、材料も道具も豊富にある。技術を学ぶ環境も整っている。

「なんでもあるし」

戦争中は何もかもが不足していた。ラシャがなくて綿で背広を作り、糸も満足になかった。そんな時代と比べると、今は本当に豊かだ。

しかし、豊かさと引き換えに失われたものもある。

「何もかも無くなつた」時代だからこそ、工夫する力や忍耐力が鍛えられた。限られた材料で最高の仕事をする技術も身についた。

今の職人たちは技術的には優秀かもしれないが、そういう精神的な強さは身につきにくいかもしれない。

引退してからの三十年以上も、それなりに充実していた。散歩、カラオケ、読書、妻との会話。単調かもしれないが、平穀で満足のいく日々だった。

「悠々自適に過ごす」

まさにその通りの生活を送ることができた。

心残りがないわけではない。

「友達に誘われたけど、麻雀、パチンコとかやらなかつたこと」

子守で忙しくて、友達との付き合いを諦めることが多かった。もう少し息抜きをしてもよかつたかもしれない。

「ゴルフをやってみたい」

今でもそんな気持ちがある。体力的には無理だろうが、一度は挑戦してみたかった。

でも、そんな小さな後悔があつても、全体的には満足している。

与えられた環境の中で、自分なりに最善を尽くした。家族を大切にし、仕事に誇りを持ち、周囲の人々との関係を大切にしてきた。

一人の職人が歩んだ昭和の歴史でもあった。戦前の農村での生活、戦争の混乱、戦後復興、高度経済成長。それぞれの時代の証人として、男は生きてきた。

職人という仕事を通して、時代の変化を肌で感じてきた。材料の不足から豊富さへ。手作業から機械化へ。既製品の普及と注文服の価値の変化。

しかし、どんなに時代が変わっても、変わらないものもある。

「自分の腕だけでやってきた」

技術への信頼と誇り。お客様への誠実さ。家族への愛情。そういう人間の根本的な部分は、時代が変わっても変わらない。

今、自分で作った背広を着ながら、男は深い満足感を覚えていた。十年前、二十年前に仕立てた服が、今でも体にぴったりと合っている。

「注文服を着ると他のものは着れなくなる」

自分の技術への誇りは、今でも変わらない。

九十年という長い人生。戦争という大きな時代の波に翻弄されながらも、職人として、夫として、父として、自分の役割を果たしてきた。

完璧ではなかったかもしれない。間違いもあったし、後悔もある。しかし、誠実に生きてきたという自信はある。

桜の花びらが風に舞って、庭に舞い散った。

「来年も見られるかな」

そんなことを思いながらも、男の心は穏やかだった。

今この瞬間を大切にすること。家族への感謝を忘れないこと。これまでの人生への感謝を胸に刻むこと。

職人として生きた男の人生は、決して派手ではなかった。しかし、確実に価値のある人生だった。

一着一着丁寧に仕立てた背広のように、一日一日を大切に積み重ねてきた人生だった。

そして今も、その穏やかな日々は続いている。

縁側で桜を眺めながら、九十歳の職人は静かに微笑んでいた。

※ヒアリングをしている内容とAIを組み合せた半フィクションになります。